

『マクベス』のテーマと言葉

富原芳彰

本稿において、私は『マクベス』のテーマと言葉との関連について若干の考察を試みたいと思う。シェイクスピアの戯曲においては、テーマと言葉とは別個に存在しているものではない。テーマが言葉を生み、言葉がテーマを荷なっている。このことは、文学作品一般について言いうることにはちがいないが、シェイクスピアの場合には、とくにその相互関係が濃密である。シェイクスピアの戯曲は、精巧に図柄を織り出した絨緞のように、言葉が複雑な綾をなして一編の芸術品として完成している。

本稿は、とくに『マクベス』について、それを織りなす言語の綾模様を記述することをめざしている。この仕事はほとんど際限なく精密にして行くことができる。本稿はまだ粗雑な略図でしかない。

私は、『マクベス』におけるテーマと言葉との関連という本題にはいる前に、『ハムレット』の冒頭の部分を同じ関心によって取り上げ、それに対する私の考察を記すことによって、本稿における私の関心のあり方を例示しておくことが便利であると考える。『ハムレット』の冒頭の部分ほど、少い分量の中に私が問題とする点を集約的に含んでいる箇所は他にないからである。それをもつ

て、私は本論への緒言にかえたいと思うのである。

二

『ハムレット』という劇は、“Who's there?” という疑問文ではじまっている。

城のどこか高いところで、一人の兵士フランシスコが見張りをしている。真冬のしかも真夜中で、寒気は凛冽である。フランシスコと見張りの役を交代するために、バーナードがやってくる。彼は見張りの場所へ近づいて行く途中で、突然、はたと足をとめ、矛を構え、闇の中へむかって叫ぶ——“Who's there?”

誰何は、普通、怪しい人影をみとめた歩哨がすることである。ここでは、誰何すべき歩哨が誰何されたのである。それだけでも事態はすでに異常である。

誰何された歩哨のフランシスコは、まず、この転倒された順序を正す——“Nay, answer me.” (“me”に強勢がある。)そして、改めて彼の方から、声のした方へむかって誰何する——“Stand and unfold yourself.”

“Unfold yourself” という言葉は、「隠蔽物を取り去ってなんじ自身の正体をあらわせ」という字義を持って

いる。

『ハムレット』という劇が、その冒頭において、“Who's there?”——“Unfold yourself” という言葉でひびかせるといふことは、この劇全体との関係において、きわめて重要な意味を持っている。なぜならば、それらの言葉は、いわば、ハムレットが彼の周囲のすべての人に対して、究極的には「人間」そのものに対して、たえず発しつづける言葉であったからである。言いかえれば、シェイクスピアはこの劇の冒頭の二行において、この戯曲のテーマとなるフレーズを明瞭に打ち出したと言ふことができる。

フランシスコから誰何を受けたバーナードは、“Long live the king!”と答えて、自分がこの王国の臣民であり、怪しい者でないことを示す。バーナードは、ただそれだけのつもりでこの言葉を発したにちがいない。しかし、この言葉も、このあとに展開するこの劇の全体との関連において受け取られるとき、それは皮肉な意味を帯びるものとなる。国王は謀殺されていまは亡く、国王を謀殺した犯人が王位を篡奪して「国王」となっている。バーナードは、“Long live the king!”と叫ぶこ

とによって、偽王クローディアスの万歳を叫んだか、あるいは、亡き国王が幽霊となってふたたびこの国に戻ってくることに妙に符合するようなことを言ったことになる。そもそも、事件の核心が国王弑殺ということにある場合、「Long live the king!」という言葉そのものが、もはや単純な意味をもってひびくわけにはいかないのである。もとより、バーナードは、自分が味方の者であることをフランシスコに伝えるためにのみこの言葉を発したのであって、その言葉にとまなう皮肉な意味などは彼の関知しないところである。また、われわれがバーナードのこの言葉に皮肉な意味を感じるのは、『ハムレット』という戯曲の全体をもう一度最初から見なおしたときのことである。しかし、作者のシェイクスピアは、バーナードにここで「Long live the king!」という言葉を書かせたとき、その言葉が帯びるのであろうすべての意味を知っていたはずである。

バーナードと見張りを交代したフランシスコは、任務を終えて寢床へ帰って行くが、(そして彼は二度とこの劇の中に戻ってこないが)彼はそこを去る前に、寒さと胸のむかつきを訴える——“Tis bitter cold, And

I am sick at heart.”

きびしい寒さの中に立ちつづけていたために体が冷え、そのために気分がわるくなったということもあろう。あるいは、彼の胸にむかつきをおぼえさせたものは、単なる寒気ではなく、やがてそこに幽霊があらわれるはずの、あたりの異様な雰囲気であったかも知れない。しかし、われわれにとつて、フランシスコの“I am sick at heart.”という言葉は、何よりもまず、ハムレットの心情を先廻って提示している言葉となるがゆえに、とくに耳朶を打つ言葉として聞えるのである。

『ハムレット』をはじめて観る人、あるいはそれをはじめて読む人には、そのようなことはわからないはずではないかという反論があるかも知れない。その反論に対しては、私も、そのとおりであると答えなければならぬ。しかし、私がいま問題としているのは、観客あるいは読者ではなくて、作者である。

シェイクスピアが『ハムレット』という劇をいかに始動させているかをもう一度見ていただきたい。

Bernardo Who's there?

Francisco Nay, answer me. Stand and unfold yourself.

Ber. Long live the king!

Fran. Bernardo?

Ber. He.

Fran. You come most carefully upon your hour.

Ber. 'Tis now struck twelve. Get thee to bed, Francisco.

Fran. For this relief much thanks. 'Tis bitter cold,

And I am sick at heart.

Ber. Have you had quiet guard?

Fran. Not a mouse stir-ring.

Ber. Well, good night.

If you do meet Horatio and Marcellus,

The rivals* of my watch, bid them make haste.
(* = partners)

以上は、『ハムレット』の冒頭の十三行である。ここで
行なわれていることは、たしかに、歩哨の交代というこ
とである。しかし、この歩哨の交代には、通常のそれ
は見られないような、異常な緊張感がある。歩哨の交代
に来たバーナードが、闇の中に聞いたフランシスコ
の足音にはっとして足をとめ、“Who's there?”と叫ぶ。
その第一声によってすでにその緊張感を作り出される。
フランシスコはバーナードが時間どおりに交代に
来てくれたことをとくに彼に感謝している。交代したバー
ナードは、ひとりでいることを恐れて、彼といっしょ
に見張りに立つことになっている二人に急いで来るよう
に言ってくれとフランシスコに頼む。歩哨を交代する
二人の人物の間の、文字にすれば十三行のやりとりで、
シェイクスピアは、不安と恐怖のたどよう緊張感を、極
寒の真夜中とともに、この劇の冒頭に作り出した。それ
は、直接的には、幽霊出現への伏線を敷き、それにふさ
わしい場面を準備しているものであると言えるであろう。
しかし、シェイクスピアがそこで用いた言葉そのものが、
この冒頭の十三行における彼の意図が単に局所に限定さ
れていたものでなかったことを、おのずからにしてあら

わしている。彼は、この劇の冒頭で、この劇全体の基音を奏でることをもまた意図したと、われわれは考えざるを得ない。彼がそこで用いたいくつかの言葉（むしろ、用いることを選んだいくつかの言葉）によって、われわれはそう考えざるを得ない。

シェイクスピアは『ハムレット』の冒頭においてその劇全体の基音を奏でることをも意図し、そのためにいくつかの言葉を選んで用いたと言うのは、しかし、十分に正しい言い方ではないように思われる。シェイクスピアはこの戯曲の第一行目から『ハムレット』を書いていたのである。いわば、『ハムレット』という劇がシェイクスピアの頭脳の中で醗酵していた。彼は脳中で醗酵していたその劇を、城壁の上の見張りの交代というアクションによって始動させようとした。そして、彼が原稿用紙にペンをおろしたとき、*"Who's there?"*——*"unfold yourself"*——*"Long live the king!"*——*"I am sick at heart"* などの言葉が、いわば自然に、彼の脳中から彼のペン先へ流れ出たと言う方がいっそう真実に近いことになるのではないか。ホレイシオが幽霊にむかって呼びかける最初の言葉、*"What art thou that usurp'st this*

time of night?" (I. 46) における *"usurp'st"* も、この劇の中心的テーマとの関連を無視できないものであって、その意味で、私がすでに問題として拾い上げたいいくつかの言葉と同じ性質を帯びている。

三

『マクベス』の冒頭の場面で、三人の魔女たちが全員で唱える

Fair is foul, and foul is fair.

という言葉は、この劇の基本的テーマの一つを提示するものである。それは反転した価値というテーマであり、右の言葉は、確立した価値の世界に対立する反転した価値の世界の存在を表明している。そして、マクベスが錦旗をかかげて国王の敵を討伐する *"brave Macbeth"* から、国王を殺して王位を奪う *"traitor"* に反転する直前の彼の言葉（彼がこの劇で発する第一声）、

So foul and fair a day I have not seen. (I. iii. 38)

は、当然、最初に引いた魔女の言葉とびびき合うものであり、そのことによって、この劇の中に対立的に存在する二つの世界、*"fair"* の世界と *"foul"* の世界の境界に

マクベスが立つという、彼の危機的立場が一気に設定される点を見逃すことはできない。

マクベスが逆賊マクドーンワルドを討った有様は、鮮血をしたたかせながら戦場からもどって来た使者によって、ダンカン王の前につきのまうに叙述される。「所詮、敵は弱体でした。」

For brave Macbeth (well he deserves that name),
Disdaining Fortune, with his brandish'd steel,
Which smok'd with bloody execution,
Like Valour's minion, carv'd out his passage,
Till he fac'd the slave;

which ne'er shook hands, nor bade farewell to
him,

Till he unseam'd him from the nave to th' chops,
And fix'd his head upon our battlements. (I. ii.
16—23)

この叙述は、反逆者となったのちのマクベス自身の阿修羅のごとき狂暴さと、その悲惨な末路とを考え合わせるとき、皮肉な意味を帯びてくる。彼の首もまた獄門にさらされる運命にあった。

マクドーンワルドの反乱が平定されるかされないうちに、コーダーの領主が国王に反旗をひるがえし、これと内報しつつ、ノルウェー王が彼の大軍をひきいてスコットランドに侵入する。これを迎え撃ったマクベスについて、ロスはつぎのまうに叙述している。

Norway himself,

With terrible numbers,
Assisted by that most disloyal traitor,
The Thane of Cawdor, began a dismal conflict;
Till that Bellona's bridegroom, lapp'd in proof,
Confronted him with self-comparisons,

Point against point, rebellious arm 'gainst arm,
Curbing his lavish spirit. (I. ii. 51—8)

右の文中、私が斜体にした部分は、やがてマクベスも、いま彼がここで戦った相手とまったく同様に、ダンカン王に叛く者になるといふこととの関連において、やはり皮肉な意味を帯びてくる。マクベスがノルウェー王と切っ先を交えた刃は、まったく同種同類の反逆の凶刃であったというふうに読みうる可能性を、斜線の部分は秘めているからである。

ノルウェー軍を撃破してノルウェー王に和を請わしめる結果を得たのち、ダンカンはずだちにコーダーの領主の死刑を宣告し、つづけてつぎのように言う、

And with his former title greet Macbeth. (I. ii.

67)

この言葉の正面の意味は、言うまでもなく、マクベスを前任者にかえてコーダーの領主にするということである。しかし、前のコーダーの領主が最後に帯びた「称号」は、「that most disloyal traitor」(前引のロマのせりふ参照)であったこともまた思い出されなければならない。同様にして、コーダーの領主が失なったものをマクベスが得たというダンカンの言葉、

What he hath lost, noble Macbeth hath won.

も、表面上の意味の裏に皮肉な意味をかくしている。

ヒースの曠野でマクベスを待ち構えている魔女たちは、マクベスが姿を見せるまでの間、彼女たちの一人に粟をわけてくれなかった船長の妻への意趣返しに、海上に出ている彼女の夫を苦しめる相談をしている。彼女の夫の船がどの港にも着けないようにして、いつまでも海上に漂わせ、嵐で揉み、彼女の夫をくたくたにさせてやる

うというのである。船長の妻に直接恨みをいだく第一の魔女は言う、

Sleep shall neither night nor day

Hang upon his penthouse lid;

He shall live a man forbid.

Wearry sev'n-night nine times nine,

Shall he dwindle, peak, and pine. (I. iii. 19—23)

マクベスもダンカン王を弑殺した直後から、永遠に眠りを失なった人間になる。

Methought, I heard a voice cry, "Sleep no more!

Macbeth does murder Sleep,"—the innocent

sleep;

Sleep, that knits up the ravel'd sleeve of care,

The death of each day's life, sore labour's bath,

Balm of hurt minds, great Nature's second course,

Chief nourisher in life's feast:—

.....

Still it cried, "Sleep no more!" to all the house;

"Glamis hath murder'd Sleep, and therefore

Cawdor

Shall sleep no more, Macbeth shall sleep no

more!" (II. ii. 34—42)

ちびり、マクベスもまた、その末路にちびりて、彼の姿を
小さくする。

now does he feel his title

Hang loose about him, like a giant's robe

Upon a dwarfish thief. (V. ii. 20—22)

第一の魔女が上引の彼女のせりみのすべあとで言う、

Here I have a pilot's thumb,

Wrack'd as homeward he did come. (6)

も、その二行目において、マクベスにも適用できる言葉
になっている。事実、マクベスは、この魔女の言葉を彼
を待つ運命の不吉な予言のようにして、彼の姿をあらわ
すのである。そして、"fair"の世界と"foul"の世界と
の境界領域にはいつてきたマクベスは、すでに記したと
おり、

So foul and fair a day I have not seen.

とらう一行を発するのである。

マクベスが魔女たちの示唆の言葉をきいた直後、ロス
とアンガスがその場に到着して、マクベスがコーダーの
領主に封ぜられたことを彼に伝えるが、ダンカン王がマ
クベスの戦功をいかに称えているかを伝えるロスの言葉
の中のつぎの箇所も、マクベスの武勇をたたえる既出の
いくつかの言葉と同様、皮肉な意味を底流として持って
いる。

In viewing o'er the rest o' th' selfsame day,

He [*i.e.* Duncan] finds thee in the stout Norway-

an ranks,

Nothing afraid of what thyself didst make,

Strange images of death. (I. iii. 94—7)

ダンカンがマクベスを「ノルウェー兵の間にいるのを見
る」という言葉は、マクベスを反逆者の群の中にその一
員として見ることに暗示を含むことができ、マクベスが
そこで行なう冷酷な殺戮は、反逆者となったマクベスが
行なう冷酷な殺戮の暗示を含むことができるのである。
コーダーの領主に封ぜられたことをロスから知らされ
たマクベスは、はじめそのことを疑う。

The Thane of Cawdor lives : why do you dress me
In borrow'd robes ? (I. iii. 108—9)

「借り着」を着たマクベスというのは、この劇のテーマの一つである。彼が着た最大の借り着は「王位」というものであった。さきほど引いた

now does he feel his title

Hang loose about him, like a giant's robe

Upon a dwarfish thief.

は、当然、このテーマにも関係を持っている。マクベスの疑問に答えたアングスの言葉の最初の一行、

Who was the Thane, lives yet.

も、皮肉な意味を帯びうる。「コーダーの領主」を「反逆者」と同義のものと解釈すれば、反逆者はまだ死んでいないのである。この劇でマクベスの前にコーダーの領主だった人には個人の名が与えられていないことに注意すべきである。そのために、「コーダーの領主」という言葉が反逆者をあらわす一般的名辞に容易に転換されうることになり、この称号がマクベスに結びつけられるた

びごとに、大きな皮肉が生ずることになる。
ダンカンには、マクベスの戦功に酬いてもう一つの榮譽

を彼に与えるために、マクベスの居城を訪問することを申し出る。そのとき、

The rest is labour, which is not us'd for you :

I'll be myself the harbinger, and make joyful

The hearing of my wife with your approach ;

So, humbly take my leave. (I. iv. 44—7)

と答えたマクベスにダンカンが応じた言葉、*"My worthy Cawdor !"* には、ダンカンは関知しないきわめて痛烈な皮肉が秘められている。マクベスはすでにこのときダンカン王の殺害を意図しており、魔女の予言を彼の妻に伝えていた。マクベスの「行幸の知らせを伝えて妻の耳をよろこばせたい」という言葉も、マクベス夫人がその知らせをいかなる理由でよろこぶかを考えると、ここにはもう明白な皮肉がある。

それより前、マクベスがダンカンの前へ帰ってくるところにも、大きな皮肉が生じている。ダンカンは前のコーダーの領主がすでに処刑されたことを聞き、つぎのような感慨を述べる (I. iv. 11—14)。

There's no art

To find the mind's construction in the face :

He was a gentleman on whom I built
An absolute trust——⁽⁹⁾

ダンカンがそう言っているそのところへマクベスが姿をあらわし、ダンカンは一旦言葉を切ったあと、「O worst thief cousin!」と呼びかけて、中絶された行を完成する。ダンカンが前のローターの領主に關して述べた言葉は、やがてそのまま彼の“worthiest cousin”（マクベス）に適用できるものになるのである。

ダンカン殺害の決意を固めたマクベスの言葉

Starts, hide your fires!

Let not light see my black and deep desires;

The eye winks at the hand; yet let that be,⁽¹⁰⁾

Which the eye fears, when it is done, to see. (I.

iv. 50—53)

と、マクベスの手紙を読んで同じ決意を固めたマクベス夫人の言葉

Come, thick Night,

And pall thee in the dunnest smoke of Hell,

That my keen knife see not the wound it makes,

Nor Heaven peek through the blanket of the dark,

To cry, “Hold, hold!” (I. v. 50—54)⁽¹¹⁾

との共鳴は、むしろ、夫婦の心の共鳴であるが、その暗黒の夜は、バンクナーの

There's husbandry in heaven;

Their candles are all out. (II. i. 4—5)⁽¹²⁾

によって、マクベス夫妻の犯行のために現実に用意されるものとなる。

夫の帰りを迎えたマクベス夫人は、マクベスに

Thy letter have transported me beyond

This ignorant present, and I feel now

The future in the instant. (I. v. 56—8)⁽¹³⁾

と言っている。マクベスの「魔女の言葉を聞いた直後、一時茫然として現在を失なう」

Present fears

Are less than horrible imaginings.

My thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man,

That function is smother'd in surmise,⁽¹⁴⁾

And nothing is, but what is not. (I. iii. 137—

42)

と言った。マクベスもマクベス夫人も、前途に虚像を与えられ、その虚像を追いかけたのである。虚像は元来実体のないものであるから、かれらがそれを攔んだと思つたときにも、掌中には何もなかったのである。しかし、かれらは、足許を忘れてその虚像を追いかけて行くうちに、大きな崖から転落し、もはや引き返すことのできない、荒涼たる地獄の原に来てしまつていた。マクベスもマクベス夫人も、ともに、未来の虚像に欺かれた人間である。かれらが追い求めた虚像は、やがてかれらの目からも消える。王位についたあとのマクベスが洩らす、
 To be thus is nothing, but to be safely thus.⁽¹⁵⁾

(III. i. 47)

は、彼が追いかけて来たものが実際には「虚無のもの」(“nothing”)であつたことに彼が気付きはじめるおそろしい瞬間であり、この劇の転回点をなすものである。マクベスに、そしてマクベスを介してマクベス夫人に、未来の虚像を与えた魔女たちは、「大地の泡のごときのものであり、実体をもつていないと見えなものは、吐く風のように風の中へ消え失せた。」

Banquo The earth hath bubbles, as the water

has,

And these are of them. — Whither are they

vanish'd?

Macbeth Into the air; and what seem'd corporal,
 Melted as breath into the wind. (I. iii. 79—82)

魔女たちによつてマクベス夫妻に与えられた虚像がかれらの眼前から消えて行く有様は、魔女たち自身のこの消え方の中にすでに暗示されている。

マクベスの居城を訪れたダンカンはその城門をくぐる前に、バンクサーと己の会話を交わす。

Duncan This castle hath a pleasant seat; the air
 Nimbly and sweetly recommends itself

Unto our gentle senses.

Banquo This guest of summer,
 The temple-haunting martlet, does approve,

By his loved mansionry, that the heaven's breath

Smells woingly here: no jutting, frieze,

Buttress, nor coign of vantage, but this bird

Hath made his pendent bed, and procreant cradle:
Where they most breed and haunt, I have observed

serv'd

The air is delicate. (I. vi. 1—10)

マクベスの居城の外面が漂わせているこの爽快さは、その内側でダンカンを待っている暗黒との対比において、大きな皮肉を生み出しているものである。

マクベス夫人は、夫の帰りを迎えたとき、深刻な顔つきをしている夫に諭して言った。

To beguile the time,

Look like the time; bear welcome in your eye,

Your hand, your tongue: look like thinnest

flower,

But be the serpent under't. (I. v. 62—5)

ダンカンを城に迎え、計画を実行すべきときが迫ったとき、マクベスの決意はゆるいだ。マクベス夫人はそういう夫を叱りかつ励ました。夫人の叱咤でマクベスの決意はふたたび固められ、マクベスは彼の妻から与えられた忠告をいまや彼みずからの言葉として言う。

Away, and mock the time with fairest show:

False face must hide what the false heart doth

know. (I. vii. 82—3)

ダンカンを迎えたときのマクベスの居城がその外側に漂わせた爽快な雰囲気は、その城の主人夫妻がダンカンに示した“fairest show”とまったく平行するものであった。

ダンカンを殺害した直後、ダンカンの鮮血にまみれた自分の両手を見て、

What hands are here? Ha! they pluck out mine eyes.

Will all great Neptune's ocean wash this blood

Clean from my hand? No, this my hand will

rather

The multitudinous seas incarnadine,

Making the green one red. (II. ii. 58—62)

という感慨を吐露したマクベスに対して、

A little water clears us of this deed. (II. ii. 66)

と言ったのはマクベス夫人であった。しかし、かれらが犯した罪は、マクベス夫人にとっても、「ちょっとした水

できれいに洗い流せる」ようなものではなかった。そのことは、やがて夢遊病者となって深夜の城中をさまよい歩く彼女自身によって証明されることになる。そのとき、彼女にとって、彼女の手にしみついた血の痕と臭いとは、どんなに拭いても消えることがなく、たとえアラビア中の香料をもってしても、彼女の小さな手はふたたびかぐわしくはならないものであった。

城の外にはかぐわしいそよ風がさわやかに吹き渡っていたが、城の中は暗黒の焦熱地獄であった。マクベス夫妻による凶行の行なわれた翌朝、何も知らずに、マクダフとレノックスがダンカンを迎えに来る。かれらが城の南門の扉を叩く音で目を覚まされた門番は、昨夜の酔ひのまだ残るねぼけ頭で、自分を地獄の門番であるかのごとくに錯覚するが、彼がそのような錯覚をすること自体がこの戯曲のテーマに関連していることは言うまでもない。門番は、自分が地獄の門番になったかのごとくに感ずる錯覚の中で、三人の男を地獄に迎え入れたような気になる。そのうちの一人は、飢饉をあてこんで小麦を貯えていたが、豊作の予想で小麦の値が下がり、失望して首を吊って死んだ農夫であり、もう一人は、常に曖昧

な言辭を弄していたが、信仰に関してはそれが通用しなくなつて死刑になつた男(原文はやや曖昧であるが「」三番目は、応そのように解釈される)、三番目は、太いズボンが流行している間は顧客から生地の一部を盗み取ることに成功していたが、流行が変わつてズボンが細くなつたときにそれをやつてついに罪が発覚したイギリスの仕立屋である。門番の錯覚の中にあらわれるこれら三人は、いずれも、最後にやつた一つのことでも埒を越えてしまつた人間たちであり、そのことにおいてマクベスと共通するものがある。

この門番の言葉の中に“equivocation”といふことが繰返し出てくることは、この戯曲のテーマとの関係において重要である。“Equivocation”といふのは、読んで字のとおり、二つ(以上)のことを一つの言葉で言うことであり、それは、当然、言葉の多義性を利用して他人を欺く詭計となりうる。王冠を戴きながら不安と恐怖にさいなまれるマクベスが、みずから求めて魔女たちを訪い、そこで与えられた二つの保証“None of woman born shall harm Macbeth.”と“Macbeth shall never vanquish'd be, until Great Birnam wood to high Dunsinane hill Shall come against him.”とは、

れも“equivocation”であった。マクベスは魔女たちによって与えられた未来の虚像を追いかけ、罅を越えて暴走した。そして彼がその暴走に気づいて不安と恐怖にとらえられたとき、魔女たちは彼に“equivocation”を与えてさらに彼を愚弄しつつ、彼を最後の破滅へ向って追い立てたのである。

ダンカンの殺害が発見され、人々が驚きさわぐ中でマクベスが言った言葉、

Had I but died an hour before this chance,

I had liv'd a blessed time; for, from this instant,

There's nothing serious in mortality;

All is but toys: renown, and grace, is dead;

The wine of life is drawn, and the mere lees

Is left this vault to brag of. (II. iii. 91—6)

は、この場で真実の言葉として受け取られることを意図して述べられた彼の虚言であるが、しかし、この戯曲全体が語っているところに照してみれば、マクベスはこの言葉によって、彼がそのことに気づかなかったがゆえに重大な過ちを犯すことになった一つの真実を述べていることになり、その機能はきわめて劇的であり、かつ複雑

である。

〔註〕本稿で扱った問題の性質上、本論中では訳文を使用できないが、参考のために、いくつかの引用文の大意をここに記しておく。

- (1) 「と申しますのは、勇猛果敢な（まさしく勇猛果敢な）マクベス殿が、運命の女神などには目もくれず、血煙の立つ刃をふりまわし、八幡様の申し子さながらに、切って切って切り進み、賊將の面前に立ちふさがると見るや、別れの挨拶もあらばこそ、やにわに相手の腹からあごへかけての逆撫で切り、たちまち首を味方の胸壁にさらしたのであります」
- (2) 「ノルウェー王みずから恐るべき大軍をひきい、あの不忠きわるまる裏切者コーダーの領主の援助を得て、凄惨な戦闘を開始いたしました。わがマクベス殿にはペローナ〔ローマの戦争の女神〕の花婿さながら、無敵の鎧に身を固め、敵の大將とまさに互角に相対し、刃向う剣と切っ先を交えて丁々発止、ついに敵の猛威をくじきました」
- (3) 「夜も昼も彼のまぶたには一睡も宿らせるものか。一生呪われて暮らす男にしてやる。七日七夜の九八十一倍を氣息奄々、どんどんしなびて、ちぢんで、やせ細らせてやる」
- (4) 「どこかで叫ぶ声が聞えたような気がした、『もう眠りはないぞ、マクベスが眠りを殺してしまった』と。あのけがれない眠りを。煩らいの細糸のもつれを正してくれる

眠り、その日その日の生の消滅、つらい労働のあとの湯浴み、傷ついた心の医業、自然が供する第二の生活、いのちの宴の最大の栄養物。——『もう眠りはないぞ』と叫びつづけるその声は城中にひびいた。『グラームズが眠りを殺してしまった、だからコーダーはもう眠れない、マクベスはもう眠れないぞ』と

(5) 「いまや彼は王という称号が、まるで小人の盗人が巨人の着物を着たように、体からすり落ちそうになっているのを感じている」

(6) 「これをごらん、水先案内の親指だよ、くにへ帰る途中で難破したやつのだ」

(7) 「当日のその後の戦況をごらんになった王さまは、貴殿がごわいノルウェー兵の間に立ちまじり、貴殿みずからが作られた死屍累々の不気味な様相に少しも恐れる気色もなかったとお知りになりました」

(8) 「お役に立たないで休んでいるのはかえって苦痛でございませう。早速私みずからが先触れ役となり、陛下のお越しを知らせて妻の耳を喜ばせてやりませう。それでは、これにておいとまを」

(9) 「顔つきから人の心を知るすべはない。あの男は私が信じて疑わなかった男だったが」

(10) 「星よ、光を隠せ。この深い暗黒の欲望を照らしてくれるな。眼は手のすることを見るな。だが、やってしまったとき眼が恐れて見ようとしないうことを、やはりやらねば

ならぬ」

(11) 「さあ、暗黒の夜よ、早くどす黒い地獄の煙をまとしておくれ。私の鋭い剣にそれが作る傷口を見せないように、天が闇のとばりから眼をのぞかせて、『止めよ、止めよ』と叫んだりしないように」

(12) 「天も節約しているらしい。星のともし火もみんな消えている」

(13) 「お手紙を読んから、私の心は、何も知らずにいる現在を飛び越えてしまい、いまこのとき未来の中にいる心地がいたします」

(14) 「目前の恐怖などは、心に思い描く恐怖にくらべれば小さいものだ。殺人ということはまだわずかに想像のことにすぎぬのに、この私の体はがたと震え、心の働らきは鈍って妄想のみ踊り、現在にないものしかいまは存在しない」

(15) 「こうであることは何の価値もない、安らかにこうであるのでなければ」

(16) 「(ダンカン) この城は気持のよいところにある。さわやかな風がやさしく肌に当って快い。(バンクオー) 夏訪れて寺院に多く見かけられますあのつばめが、せつせと巢を作っているのを見ましても、このあたりには天の息吹きがかぐわしく薫っていることがわかります。軒先、なげしの下、控え壁、その他都合のいい隅という隅に、この鳥が吊床や籐の揺籃をかけていないところはあります。この鳥

が好んで集まり、巢を作るところは、経験によりますと、
空気がすがすがしいございます」

(17) 「世間を欺くためには、世間の人と同じ顔をしていなければいけません。眼にも、手にも、舌にも、歓迎のお氣持をあらわして。外観は無心の花と見せかけ、実はそのかげにいる蛇になるのです」

(18) 「さあ、行こう。顔をよくして世人を欺くのだ。偽りの心のたくらみは偽りの顔で隠すしかない」

(19) 「何という私の手だ。は、眼の玉が飛び出しそうだ。大ネブチューンの大洋の水をつくしても、私の手からこの

血を洗い去ることはできません。いや、この私の手が、かえってあの広大な大海原を朱に染め、緑の波を一面の真紅に変えてしまおう」

(20) 「こんな事の起こる一時間前に死んでいたら、幸福な一生を送れたものを。いまこのときから後は、もはやこの世には真に大事なものは一つもなくなつた。すべて取るに足らぬものばかりだ。誉れも徳も死に絶えた。いのちの酒は飲み干されて、この地下倉に残されているのはただおろかすばかりだ」

(一橋大学教授)